

胆管がんが増加傾向に

「がんをよく知るための講座」(兵庫県予防医学協会、神戸新聞社主催)がこのほど、神戸市兵庫区の健康ライフプラザで開かれた。神戸大医学部附属国際がん医療・研究センター(同市中央区)の味木徹夫センター長(54)が、胆管がんの特徴や治療方法について講演した。要旨は次の通り。

(まとめ・篠原拓真)

早期発見難しく、低い5年生存率▶▶

神戸で「がんをよく知るための講座」



胆管がんについて話す神戸大医学部附属国際がん医療・研究センターの味木徹夫センター長(神戸市兵庫区駅南通、健康ライフプラザ)

胆管は肝臓と十二指腸を結び、肝臓で作られた胆汁を十二指腸まで通す役割をしている。胆管がんとは、この胆管にできるがんのことを指す。減少傾向にある胃がんや肝臓がんと違い、胆管がんは増加傾向にある。がんの5年生存率でみると、胆のう、胆管

がんはワースト2位。生存率は20〜30%と、非常に治りにくい病気だ。特徴は胆汁が肝臓から腸に流れなくなる閉塞性黄疸。胆管がんの5〜6割ぐらいがこの閉塞性黄疸を伴っている。しかし、胆管がんはほとんどの場合が無症状で、黄疸や

腹痛がきっかけで見つかることがあっても、早期の発見に至ることはほとんどない。見つかった時点で90%以上が進行がん。リンパ節に転移していることも多く、約40%は発見段階で転移しているとも言われる。

治療は主に手術、化学療法、放射線治療の3種類。進行がんにも最も有効な治療法は外科手術で、胆管がんを見つけたら、まず手術できるかを判断する。

がんが胆管にすこく広がっていたり、周囲の血管に進展していたりすると大手術になるので、施設によって、できるできないが分かれる。手術で対応できると考えられているのは患者の約半数。神戸大では6〜7割の患者が手術で対応できている。その際、がんをどれだけ切り取れるかが重要になってくる。

術後の化学療法視野に研究

遠いところにあるリンパ節に転移があった場合は手術ができないため、抗がん剤治療になり、有効な抗がん剤は3種類しかない。手術できない、際に一番良いとされるのは、塩酸ゲムシタピンにシスプラチンを加えた療法。生存期間の中央値が11・7カ月で、最長3年半ぐらい生きることができるといふ。

がんを切り取った後の再発率が50%と高いので、術後の化学療法も必要ではないかとなっているがエビデンス(証拠)が乏しい。そのため、関西では大阪国際がんセンターや神戸大学などの大きな病院が集まり、いろいろな抗がん剤を試してデータを集めている。国もS-1という薬が術後補助として有効かどうかを試験し、抗がん剤治療と手術を組み合わせて、胆管がん患者が長生きできないかを研究している。